

翻訳と評釈
ポーラ・ミーハン「アルテミスの安らぎ」

訳・評釈 池田寛子

The Solace of Artemis

I read that every polar bear alive has mitochondrial DNA
from a common mother, an Irish brown bear who once
roved out across the last ice age, and I am comforted.

It has been a long hot morning with the children of the machine,

their talk of memory, of buying it, of buying it cheap, but I,

5

memory keeper by trade, scan¹ time coded in the golden hive mind
of eternity. I burn my books, I burn my whole archive:
a blaze that sears, synapses² flaring cell to cell where

memory sleeps in the wax hexagonals of my doomed and melting comb.³

I see him loping towards me across the vast ice field

10

to where I wait in the cave mouth, dreaming my cubs about the den,
my honied ones, smelling of snow and sweet oblivion.

For Catriona Crowe

'The Solace of Artemis' by Paula Meehan is reproduced by kind permission of
the poet.

Paula Meehan, *The Solace of Artemis* (Dublin: Dedalus Press, 2023), 15.

1 scan: 念入りに隈なく読み取る、精査する。

2 synapses: シナプスは二つの神経細胞の接合部で、記憶の形成に関わっている。
細胞間の伝達を行う。

3 comb: ここでは honeycomb のことで、ハチの巣。

アルテミスの安らぎ

現存するすべての北極熊は ミトコンドリアの DNA を持っている
 共通の母グマ アイルランドのヒグマから引き継いだ DNA を
 それは最後の氷河時代を闊歩した熊 こんな話を読むと心安らぐ。
 マシン
 機械の時代の子どもたちと共に過ごした長く熱い午前

みんなメモリの話をする メモリを買う 安く買うと でも私の仕事は
 記憶の保管 永遠の金色の蜂の巣の心に刻まれた時をスキャンする。
 私は自分の本を焼く 書庫を丸ごと焼き尽くす—
 燃える閃光 細胞から細胞へと熱を送るシナプス そこでは

記憶が眠る 運命の定めるままに溶けていく私の蜂の巣の蜜蠟の六角形に包まれて。
 私には見える 彼が大股で近づいてくるの 広大な氷原を横切り
 洞窟の入り口で待つ私のもとへと 夢に見るのは ねぐらにいる私の子熊たちのこと
 蜜の如きわが子よ 雪と甘い忘却の香りがするよ

カトリオナ・クロウに寄せて

(評釈)

アルテミス (Artemis) はギリシア神話の女神で、ローマ神話のダイアナに相当する。熊や鹿と縁が深い。この神のルーツを古代の信仰の対象だった野生の動物に求めてもよいだろう。したがって、アルテミスはこの詩の主人公「アイルランドのヒグマ」の守護神であると同時に、両者は限りなく一致しうる。熊の未来に心を砕くアルテミスはまた、この詩の語り手、詩人ミーハンとも重なる。

アイルランドの熊はおよそ一万年前に絶滅した。だがその骨が洞窟で発見され、雌熊のDNAが明らかにされた。さらにはそのDNHは現存する北極熊に引き継がれていることも分かった。この詩はこうした研究報告にインスピレーションを得て書かれている。詩の底流にあるのは、あらゆる生物が共有する記憶をめぐる冥想である。

詩には複数の記憶の媒体が織り込まれている。太古から生命の記憶、すなわち遺伝子情報を運ぶDNAに加えて、機械 (machine 1.5)、心 (mind 1.6)、書物 (books 1.7) である。ここでの「心」の意味は「意識」や「脳」に近い。

ミーハンが詩人としての自らの使命を記憶の保管と継承だと考えている (memory keeper by trade 1.6)。古来アイルランドの詩人が口承で物語、詩歌、信仰を伝えてきたことが念頭にあるようだ。記憶の蓄積と伝達の主要な手段は、口承から手書きの文書へ、印刷物へと移行した。目下、それは「機械」に取って代わられつつある。このプロセスはこの詩にも刻まれている。ミーハンが紙切れ一枚あれば詩は運べる、なければ心に入れておけばよい、と語っている。軽やかでかつ密度の濃いこの短詩は何よりも心に刻みこんでおくのにふさわしい。

人の体内の記憶システムは六角形の物体の集まりで成り立っているという。このため、この詩では「心」、そして「記憶」の眠る場所が、やはり六角形の集積物である蜂の巣として表現されている。記憶の守り手として詩人が関心を向け、「スキャン」しようとするのは、「永遠の金色の蜂の巣の心に刻まれた

時」である (I scan…time coded in the golden hive mind / of eternity ll.6-7)。詩人が考える「記憶」のエッセンスが、この美しく謎めいた表現に込められている。何よりもまずそれは「永遠」の一角に存在する「時」である。詩人は「蜂の巣」(hive l.6) のような「心」に組み込まれたその「時」を吟味し、写し取ることを生業とする。その「心」が詩人自身のものなのか、誰か別の人のものなのかは明らかにされない。人類の記憶に通ずるような瞬間を捉え、言葉にすることがこの詩人にとっての詩作なのだろう。ミーハンは歴史の影に潜む人や出来事に光を当て、それを永遠化するような詩を紡ぎだしている。

「蜂の巣」という言葉はもう一度出てくる。「そこでは記憶が眠る 運命の定めるまま溶けていく私の蜂の巣の蜜蠟の六角形に包まれて」(…where / memory sleeps in the wax hexagons of my doomed and melting comb l.8-9) という箇所、別の単語 'comb' (l.9) が使われている。ここからは詩人の体内の「蜂の巣」に誰のものとも知れない「記憶」が潜んでいることが分かる。「運命づけられ」(doomed)、「溶けていく」(melting) という言葉で形容されているため、「蜂の巣」を自分で意識的に操作することはできないことも分かる。その中に納まった「記憶」も何か得体のしれない力に支配されているようだ。個人の意図とはかかわりなく体に刻まれ、継承されてきた「記憶」、これに関係するのが詩の冒頭に出てきた DNA である。蜂の巣と身体が共有する精緻な六角形は、自然界と人の根源的なつながりを象徴している。

心身に宿る記憶と対比されているのが、書物や機械に蓄えられた記憶である。「機械の時代の子どもたち」(the children of the machine l.4) が口にする「メモリを安く買う」という一言への詩人の距離感、危機感でもある (their talk of memory, of buying it, of buying it cheap l.5)。二度繰り返される「買うこと」(buying) は、売買の対象としての「メモリ」(memory) に対する詩人の違和感を際立たせている。だが詩人は機械を攻撃するのではなく、「書物を焼く」自分を想像する (I burn my books, I burn my whole archive l.7)。「私」は機械と書物の両方を敵視しているのだろうか。ここで想起すべきは 19 世紀初めに

機械うちこわし運動を行った人々の感覚だろうか。決してそうではない。この詩は「私は読む」(I read l.1) で始まり、詩のインスピレーションとなった情報は読んで得られたものだとわかる。また、この詩は古文書や手稿のデジタル化に貢献したアーキビスト(記録保管人)、カトリオナ・クロウ(Catriona Crowe)に捧げられているため、記憶が機械に保存されることそれ自体に反対するつもりはミーハンにはなく、むしろ歓迎したいという気持ちがあることは明らかである。書物を焼く「私」の姿は仮想であり、これを思い描くことによって、自分が何を大切にしたいのかを再考しようとしているようである。

大事なのは記憶をため込むのではなく、生かすことなのだろう。ミーハンは「過去」と「記憶」が自分にとってどんな意味を持つのかについて、次のように語っている。

過去というものは存在するのですか。あるのは過去との関係だけでしょうか。詩は発掘の道具であり得ます。あなたは掘ることはありますか。記憶それ自体は私にとって意味はありませんが、今を変える役目を担うという意味での記憶に私は強く惹きつけられます。前進する前に後退するのです。

(Is there such a thing as a past? Or is there only a relationship with that past? Poetry can be a tool for excavation. Do you dig? Remembering for its own sake wouldn't interest me, but memory as agent for changing the present appeals to me greatly. But you go back before you go forward.)⁴

「メモリを安く買う」という言葉遣いへの詩人の抵抗感はさまざまな連想を呼ぶ。記憶量とは情報量でもあり、このことに絶大な経済価値が生まれていることも想起される。目に見えない情報という財産の保存はウェブ上のストレージに委ねられる。また、メモリは高速のデータ通信に必要である。だが大容量のメモリを確保して一体何をしたいのか、すべきなのかについては、絶えず考える必要があるだろう。記憶をウェブ上に置く、あるいはメモリスティックで

4 Eileen O'Halloran, Kelli Maloy, and Paula Meehan, 'An Interview with Paula Meehan', *Contemporary Literature* 43.1 (2002), 13.

持ち運ぶことの危うさを十分に認識する必要もあるだろう。膨大な情報は一瞬で拡散される。デジタル化された記憶が瞬時に消える可能性もある。この意味では記憶はいまだかつてないほどに軽く儂いものになったとも言える。絶滅したアイルランドのヒグマのDNAの存続のニュースに詩人は、「何か残るものがある」という安堵感を抱いた。これが「アルテミスの安らぎ」の理由である。だが、この詩には記されていないが、ミーハンは「最後に残るのは人間ではないかもしれない」という可能性を想像することを促したかったようだ。⁵ 人類が減び、メモリを詰め込まれた「機械」が崩壊すれば、デジタル空間に築かれた仮想現実、高度な文明の証は跡形もなく消え去ることだろう。もちろんその時は記憶を運ぶための書物も心も存在しない。

「私を見る」(I see him… 1.10) で始まる三行が詩を締めくくる。これは「私」と北極熊の婚姻のシーンである。「私」は氷河時代の「アイルランドのヒグマ」かもしれない。あるいはここにいるのは今を生きる北極熊のカップルなのかもしれない。温暖化によって北極の氷が溶け、北極熊は危機的な状況に置かれているという。「私」はミーハンでもある。詩人は熊になった自分を想像し、人と動物の共存の可能性に思いを馳せているのだろう。人類がこの世から消えても、他の生物の力を借りて保持される人の記憶があるかもしれない。精巧な六角形を人以外の何者かが紡ぎ続けてくれるだろう。そう思うことは救いになりうるだろうか。答えのない問いが詩の後の空白に続く。

本稿は科研費(二一K〇〇三八七「トランスナショナルなコンテクストにおける現代アイルランド女性詩の挑戦と展望」)の研究成果の一部である。

5 Paula Meehan, *Imaginary Bonnets with Real Bees in Them (The Poet's Chair: Writings from the Ireland Chair of Poetry)* (Dublin: University College Dublin Press, 2016), p.29.